清宗根付館 便り

掛川市二の丸美術館様におきまして、『京都 清宗根付館コレクション 手のひらのミクロコスモス 根付に遊ぶ』－開館25周年記念特別展が9月24日(日)～11月19日(日)で、開催中。

掛川市二の丸美術館様は、江戸時代から明治にかけての喫煙と装飾の習俗を、文化的・歴史的に窺い知る約2,000 点以上もの細密華麗な名品を擁する掛川城公園内に位置する美術館です。前理事長様が当館にご来館されたことがご機縁となり、この度の特別展へご協力させていただくことになりました。美術工芸をご専門にされている学芸員様ならではの、現代根付の多様な側面を浮かび上がらせるテーマとそれに添ってご選定されました約 400 点の作品をご提供いたしました。見どころ満載の特別展でございます。是非、ご高覧ください。

根付研究 最前線『あまたの堤物と反骨精神』

公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員　大西 弘祐（忠雲）

絵画資料において、堤物を小器具（留具）によって装着していたのは「京中の上下賞翫する事不斜」と、都で絶大なる人気を博した新興の女性芸能者らでした。『当代記』によれば、彼女らの扮装は、このころ京を騒がせていた放埒で常軌を逸した行動を嗜好した<かぶきもの>の姿だったと言います。

では、絵画資料に描き出された天正期から慶長期（1573 年～ 1615）の風俗を記した同時代の史料には、堤物や留具はどのように記されているのでしょうか。かぶき踊りの女性芸能者を記した『かぶきのさうし』（江戸初期）の詞書には、「こしのさげものなにゝぞなしぢまきゑのいんろうにこんぢのきんらんの大巾著きんのへうたんとりまぜてくすみてさげしありさま」とあり、こちらも絵画資料に違わず、シテの悠然とした姿の描写に、梨地蒔絵の印籠、金襴（緞子）の大巾着、そして金の瓢箪がしっかりと記されています。堤物の装着は、やはり彼女らを特徴づけるものだったのでしょう。さらに見逃せないのは、腰の堤物に「注目!」と言わんばかりの「なになにぞ」という驚嘆の表現をもって表しているところです。こうした表現からも、堤物の新奇性ないし装着のスタイルが担っていた鮮烈な社会性が窺えます。また、いくつもの堤物を腰に装着していたと言えば、これに先立って思い出されるのが、『信長公記』（江戸初期）に記された若き日の信長の装いです。『信長公記』は、織田信長の旧臣であった太田牛一が著述した織田信長の一代記ですが、この内、「上総介殿形儀の事」には「其の此の御形儀、明衣の袖をはずし、半袴、ひうち袋、色ゝ余多付けさせられ」、また「山城道三と信長御参会の事」には「御腰のまわりには、…火燧袋・ひょうたん七ツ、八ツ付けさせられ」とあります。これが時代劇でお馴染みの信長の姿の種になっている箇所ですが、「愚か者」を表す装いに、堤物をあまた装着していたことを上げているのも、やはり見逃せません。なお、この装着のありようは、信長の地位や立場を倒錯させた姿でした。

このように、質的ないし量的に甚だしい堤物を装着するというスタイルには、どうやら反骨精神や「常」に対する倒錯などを表象する意味が込められていたのかもしれません。

2024年 1月～3月の特別企画展のご案内

ちいさきものは、みなうつくし。

『思い入れのある根付』展

1月「Kawaii!かわいい根付」展	■ 1月6日（土）～31日（水）
2月「遊び心のある根付」展	■ 2月1日（木）～29日（木）
3月「私が選ぶ一品」展	■ 3月1日（金）～31日（日）

京都 清宗根付館　公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）
家庭画報（目次頁）に毎月掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

SAGAWA PRINTING
公式サイトはこちらから▶
佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

公益財団法人 京都 清宗根付館とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

宗 Salon
現代根付
Contemporary Netsuke Newsletter
AUTUMN ~ WINTER　Issue. 14

［目次］

■企画展の見所
■根付研究 最前線
■根付館便り

［発行元］
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地（壬生寺東側）
電話 075（802）7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

日本の美、ここに極まれり。『根付（ねつけ）の品格』展

四季の移ろいを愛で、花鳥風月に風流を託す、日本人の美意識は日常の至るところまで丁寧に手間をかけて磨かれてきました。万葉集ではモノに想いを託すことを寄物陳思歌と呼び、人とモノの関係性に特別な意味を持たせてきました。「ねつけ」が初出する『寶藏（たからぐら）』巻三（1671年発刊）には「根付の映えを見るに（中略）いとおくぶかし」と魅入る様子が記されています。都市文化の申し子である根付は手間をかけた出来栄えによって唯一無二の品格をもつ興趣を醸し出し、好事家を虜にしてきました。今回は「根付の品格」をテーマに、日本人が築いてきた美意識の発露を見ていきます。

10月には「日本の美」と題し、日本の風光明媚な自然、風習、美意識、理想郷など作家が考える日本の美を特集します。

11月は「秋の名品展」と銘打ち、優れた作家を表彰する「ゴールデン根付アワード」受賞作品からノミネート作品までを一堂にご覧いただきます。

12月は歴史の糸を紡いできた人物たちを特集して、「歴史上の人物」を象った根付で時代の流れを辿ります。

告知ポスター

2023年 10月～12月 企画展の見所 ※掲載の根付は原寸サイズです

10月 小さきもの、はかなきものへの根付賛歌。

■ 10月1日（日）～31日（火）

「日本の美」展

四季折々のうつろいや自然に美しさを見いだしてきた日本人は、「もののあはれ」と「をかし」に代表される美意識を美術工芸に活かしてきました。時には大胆な左右非対称の構図で、時には細部にまで超絶技巧を施し、時には不完全さに美を象徴したりして独自の様式を築いてきました。暮らしに寄り添い、所作や習慣にまで影響を与えてきました。今月の企画展では現代作家たちが「日本の美」の魅力の再発見をテーマにした新作を紹介します。

井尻 朱紅（1954～）
「春秋」 高3.7cm
黄楊・本金蒔絵

春の桜と秋の紅葉が混在する異時同図法で四季の時間経過を表す。中面には雄大な富士山を閉じ込め、奥行きを感じさせる。

佐々木 明美（1959～）
「雪月花」 高3.5cm
白蝶貝

自然の絶景や四季の風雅に遊び楽しむ感性は「もののあはれ」に通じ、雪月花は日本人が培ってきた美意識の象徴となっている。

工藤 道齋（1950～）
「お正月」 高5.9cm
象牙

羽子板は女児の初正月を祝い、邪気を跳ね除け無病息災を願ったもの。着物には松竹梅の柄を入れて吉祥尽くしとなっている。

阿部 裕幸（1952～）
「開運熊手」 高3.6cm
象牙

浅草で初冬の風物詩と言えば酉の市。縁起物の「熊手（くまで）」で福を「かっこめ」「はっこめ」と威勢よく声が上がる。

向田 陽佳（1968～）
「根付大使Miss清子」 高4.6cm
象牙

昭和2（1927）年に日米親善の人形外交が行われたことから翻案して、根付を携えて日本の美を世界に伝える根付大使に。

11月 栄光のいただきへ!根付に込めた熱い想い。

■ 11月1日（水）～30日（木）

「秋の名品」展

京の都で出雲阿国が堤物を佩用して踊ってから、四世紀にわたる根付の歴史が始まりました。それ以来根付師たちは現在まで変わることなく新しい表現や技法を探究してきました。伝統は作り手と担い手が協働することで継承されていきます。日本で生まれ担い手によって愛された根付は現在世界のNETSUKE として広がりを見せています。当館では現代作家による自由で新たな挑戦を奨励するTHE GOLDEN NETSUKE AWARDS※を設けて表彰しています。本年度の受賞作とノミネート作品を一堂に展示します。

※当館で展示された新作根付の中から総合的に優れた技術や発想を持つ作品に与えられる賞。

THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

及川 空観（1968～）
「桃太郎」 高4.3cm 象牙

桃太郎が手にもつ褒賞のきび団子を懸けて猿と鬼が腕相撲。物語の登場人物が総出演で見守り、和気あいあいとした様子が伝わる。

THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

栗田 元正（1976～）
「未練酒」 高4.7cm 象牙

道ならぬ仲の二人は旅の宿で夜通し楽しく語り明かしたのだが、起きると男の姿はなく、残された女性の口に運ぶ酒には未練の味がにじむ。

優秀賞

宍戸 濤雲（1960～）
「枇杷葉湯売り」 高3.1cm 象牙

枇杷の葉と漢方薬を煎じた「枇杷葉湯」。暑気払いの売り声を響かせながら、天秤棒を担いで町を流す行商は夏の風物詩として親しまれた。

優秀賞

伊藤 忠綱（1966～）
「鼠秤」 高1.8cm 象牙

秤（はかり）の上に鼠が乗って「鼠ばかり」になったという駄洒落。携帯用の天秤は商売を表し、鼠は大黒の使いで福を招く。

理事長賞

宮崎 輝生（1936～）
「鏡獅子」 高4.7cm 乾漆

芝山象嵌の第一人者による作品。斜め上からの視線で奥行きを強調し、獅子が飛び上がった一瞬を表現。箱中には紅白の牡丹が。

12月 歴史を紡ぎ、時代を切り拓いた人物たち。

■ 12月1日（金）～28日（木）

「根付 英雄列伝」展

歴史は単なる過去の出来事ではなく、人が人へとつないできたヒューマンドラマです。それは幾重にも交錯して繰り広げられるスペクタクル活劇です。その筋立てのない舞台の主人公は私たちであり、今を生きる物語を描き出すのも私たちなのです。歴史を振り返ることは、現在の今を理解する指針にもなり、未来を推測する智恵にもなります。12 月はそうした歴史上の偉人、賢人を象った根付を大集合させて、今年最後の豪華キャストであなたをお迎えいたします。

森 哲郎（1960～）
「関羽」 高6.1cm
象牙

三国時代に劉備への義を重んじ、武に長けた稀代の英雄として人気が高く、のちに神格化されて関聖帝君として信奉されている。

中村 雅俊（1915～2001）
「雪舟」 高3.4cm
象牙

室町時代の画僧で日本独自の水墨画を確立した。幼少期に涙で描いた鼠が本物の鼠になったという逸話を題材にしている。

河原 明秀（1934～2016）
「座頭」 高6.6cm
黄楊

初夢に見ると吉とされる、一富士二鷹三茄子は、四扇五煙草六座頭と続く。座頭は毛が無い（怪我無い）ため縁起が良いとされた。

桜井 英之（1941～）
「イエスキリスト」 高6.5cm
黒檀・象牙

世界で約２４億人が信者とされるキリスト教の始祖。「聖書」は人類史上最大のベストセラーと知られる。作品に深い苦悩を込めている。

山本 伊多呂（1961～）
「売茶翁」 高3.4cm
象牙

江戸時代中期の禅僧で、煎茶の中興の祖として京都東山で売茶業を営む。池大雅や円山応挙、伊藤若冲らの文人墨客と親交を結んだ。